

五部大乘経の起源に関する一考察

山口 弘江

一 はじめに

ここにいう五部大乘経とは、『華嚴経』『大集経』『大品経』『法華経』『涅槃経』を一括りとした総称として用いられるものである。中国天台宗の祖、天台智顛（五三八〜五九七）の説に基づいたものとされるが、日本では平安時代以降、天台宗の寺院や貴族たちの間でこれら五経の講説や書写・供養などが盛んに行われることで、中国にはない独自の信仰が形成されていく。

このような流れから、日本においては五部大乘経に関する研究が少なくないが、日本史学や日本文学の分野によるものが大半を占め、仏教学の範囲での考察はこれまでほとんどなされてこなかった。大山仁快は一九八七年に認められた一文の中で五部大乘経に対する自らの研究を回顧しているが、ここでは「仏教学側から、なぜこの五経が一括で扱われるのか、その思想的特色・関連を研究すること」『大日本史料』ほか既刊史料から関連史料の抽出蒐集、「未刊行で地方に埋もれている資（史）料の調査蒐集」の三点を必要な作業として挙げている。そして、現況として思

想的な特質については未着手であり、それ以外にも中国における歴史的な展開も不明だとして、具体的な研究の課題を記している¹。

大山が指摘する仏教学側からの思想的解明については、管見の限り、その後もさほど進展していないようである。そこで本稿では、五部大乘経が生み出されたきっかけとされる智顛の説を中心に考察し、後世に大きな影響を与えていることとなった説の思想的背景や意味についての検討を試みることにしたい。

二 先行研究にみる五部大乘経の諸問題

先述のとおり五部大乘経に関する研究は枚挙に暇がないが、ここでは先行研究を参考に、その起源を探るにあたり鍵となる基本的な情報を概観しておきたい。

日本における五部大乘経についての直接的な記録として最も古いものは、鎌倉時代の成立とされる『濫觴抄』²などに記される承暦二年（一〇七八）の法勝寺大乘会に関するものだ³とされる。またこれ以前にも関連する記録は見られ、現在のところは康保四年（九六七）に良源（九二二〜九八五）が比叡山横川で始めた四季講において、『涅槃経』（春）、『華嚴経』（夏）、『法華経』（秋）、『大集経』・『大品経』（冬）が用いられたという例までさかのぼることができようである³。

このように、五経を珍重する伝統は平安時代より始まっており、その後、室町時代にかけて、五部大乘経は一切経の略本のように見なされ盛んに書写されるようになるという⁴。天台宗以外でも五部大乘経の信仰は広く流布し、梅尾高山寺や高野山などにも感されたほか、現存する写本や刊本も数多くあることが報告されている。また、

曹洞宗の祖師の靈廟ともいべき永光寺五老峰に瑩山紹瑾（二二六四～二三三五）の自写の五部大乘經が埋葬されたという伝承も興味深いものである。さらに国文学の方面は、『保元物語』などが伝える、崇徳上皇（二一九～二一六四）が流配となった讃岐において書いたとされる「血書五部大乘經」の伝承も有名であるが、これも日本における流行を示した事例の一つと言えよう。

さて、このような五部大乘經の信仰とは、どのような経緯で起こったものであるのか、この点について最も詳しく論じているのが湯之上隆の論考である。その中では、先にも言及した法勝寺の大乘会に際して作成されたという大江匡房（二〇四一～一二二二）による結願文と表白に、『法華玄義』卷五の「究竟大乘、無過華嚴・大集・小品・法華・涅槃」がそのまま引用されているほか、その後の五部大乘經の供養に際した願文にも『法華玄義』の文が引用される例を指摘している。また、鎌倉時代の後半に成立したとされる『拾芥抄』下には『四教義』に基づくものと述べられている。これらの記述により、平安末より隆盛した五部大乘經の信仰は、天台智顛の『法華玄義』や『四教義』に対する研鑽の伝統から発展したものであると考えられている。

このように五部大乘經という概念は直接的には智顛の説に基づくと考えられるが、別の指摘もなされている。例えば兜木正亨は、日本において『大品經』三十卷、『宝積經』百二十卷、『大集經』六十卷、『華嚴經』六十卷、『涅槃經』四十卷の計三百十卷が一切經の略本のように行われたが、このうち数の多い『宝積經』を除き、『法華經』に開經『無量義經』と結經『觀普賢經』を加えた十卷に代えて五部大乘經が計二百卷となったという。また禿氏祐祥は、特に中国で行われた小蔵四大部との関係に着目する。房山石經の清寧四年（二〇五八）「四大部經成就碑記」に基づく『華嚴經』八十卷、『大般若經』六百卷、『宝積經』百二十卷、『涅槃經』四十卷の計八百四十卷よりなるもの、または『仏祖統紀』卷四十七の紹興二十三年（一一五三）の項に、「小蔵四大部者、亦如其数（世以華嚴・涅槃・宝積・

珠林、為四大部」(大正藏四九卷四二六頁中)との記述が見られることから、『大般若經』六百卷に代えて『法苑珠林』百卷を加えた計三百四十卷の組み合わせなどもあることを指摘する。これに基づき、五部大乘経は天台宗の五時教判のうち阿含経を除いて五部としたが、中国では方等部を代表する經典として『宝積経』を選定し、日本では卷数を少なくするために『大集経』に代え、『大般若経』ではなく、『大品般若経』にしたのも同様の理由だとの見解を示す。ただし、両氏のこのような推測は、『法華玄義』等の記述の存在を認識していないことに由来するものと思われる。

よつて五部大乘経は、智顛の記述に基づいた『華嚴経』『大集経』『大品経』『法華経』『涅槃経』の五経よりなるものであることが知られるが、実際に五部大乘経として書写や摺写されたものは、その他の関連する小部の経も含め、以下に挙げる二百巻が基本とされるようになる。

大方広仏華嚴経

六十巻

(結経) 梵網経

二巻

大方等大集経

三十巻

同 日藏経

十巻

同 月藏経

十巻

(結経) 菩薩瓔珞本業経

二巻

摩訶般若波羅蜜経 (大品経)

三十巻

(結経) 仁王般若波羅蜜経

二巻

妙法蓮華経

八巻

(開経) 無量義経

一巻

(結経) 觀普賢經

一卷

大般涅槃經

四十卷

(開経) 仏垂般涅槃略説教誡經

二卷

(結経) 像法決疑經

一卷

計 二百卷¹²

ただし、この二百巻という数字は早くより定まっていたわけではなく、巻数をめぐる様々な議論を経て、鎌倉末期から南北朝時代にかけて定着したものであることが指摘されている。鎌倉後期の春日版五部大乘経は基本的に宋版を底本としているが、『法華経』は七巻よりなる宋版ではなく日本の伝統に基づいた八巻本が採用された例に顕著なように¹⁴、きりのよい数字に収めることが優先された結果、二百巻に落ち着いたものと思われる。また、五経だけではなく関連する經典群を集めて構成していることから、「五部大乘経」という名称が定着したと考えられよう。

三 智顛の大乘經典理解と「無過華嚴大集大品法華涅槃」

前項に概観したように、五部大乘経が『法華玄義』および『四教義』に見られる智顛の説に基づいたものであるとされる点は、諸研究にほぼ一致した見解のようである。

その典拠とされる『法華玄義』巻五上では、次のような文脈を経て傍線部に五部大乘経の由来とされる一文が述べられている。

数者、人解不同。有言「頓悟即仏、無復位次之殊」。引思益云。「如此学者、不從一地至一地」。又有師言。「頓悟初心、即究竟圓極、而有四十二位者、是化鈍根方便、立淺深之名耳」。引楞伽云。「初地即一地、二地即三地、寂滅真

如、有何次位」。又有師言。「初頓悟至十住、即是十地、而說有十行、十迴向、十地者、此是重說耳」。今謂、諸解悉是偏取。然平等法界、尚不論悟与不悟。孰辨淺深。既得論悟与不悟、何妨論於淺深。究竟大乘、無過華嚴、大集、大品、法華、涅槃。雖明法界平等、無說無示、而菩薩行位、終自炳然。（大正藏、三三卷七三二頁下〜七三三頁上）

また、『四教義』卷十二にもほほ同じ文脈で五部に関する言及が見られる。

第二正明円教位者、亦還約七位。明五十二位不同。一十信、二十住、三十行、四十迴向、五十地、六等覺地、七妙覺地。但解者不同。有師言。「円教頓悟。一悟即是仏、無復位別之殊。說十地位者、為鈍根人耳。如思益經云。如此學者、即不從一地至一地」。又有師解言。「円教既是頓悟。初心一悟、即究竟円極。而有四十二位、但是化物方便、立淺深之名耳。故楞伽經云。初地即二地、二地即三地。寂滅真如、有何次位也」。又有師云。「円教初頓至十住、即是十地。而說有十行、十迴向、十地者、此是重說意」。謂、此諸解釈、悉是偏取。平等法界、尚不論悟与不悟。孰論淺之与深。不悟而論悟者、不淺不深論淺深也。尋諸大乘經、明理究竟、無過華嚴、大集、大品、法華、涅槃。雖明法界平等、無說無示、而菩薩行位、終日炳然。（大正藏四六卷七六一頁上〜中）

両書がここで述べているのは、天台教判の四教（藏・通・別・円）のうち円教で立てられる五十二位（十信・十住・十行・十迴向・十地・等覺・妙覺）の行位に関する内容である。前半では円教の行位に対する三師の見解を挙げた上で、「（今）謂」以下に自説を展開する。

『法華玄義』に基づけば、具体的には以下のような主張がなされている。平等法界という真理においては悟と不悟は論じないのだから浅深の区別がないが、修行者においては悟と不悟とを論ずることができるのだから、その行位の高低を論じることには問題はないとした上で、大乘の真理を極めているのは、『華嚴經』『大集經』『大品經』『法

華經』『涅槃經』であるといひ、これらには法界の平等や（真理が言語表現を超えた）無説無示であることを明かしているが、それでも菩薩の行位があることは明らかではないか、と主張する。ここに示された主張は、鈍根の人のためであるとか、教化における方便であるとか、ただ繰り返しているだけだ、といった円教行位に階梯があることに対する批判への反論と見ることができよう。

なお、『四教義』とほぼ同文が『維摩經玄疏』巻四にも見られる。¹⁵『維摩經玄疏』は、『四教義』が撰述された後に改めて編集されて成立した文献で、『四教義』の内容は、『維摩經玄疏』巻二・四にわたつて説かれる「四教分別」に相当する。¹⁶基本的には『四教義』の方が詳しく、『維摩經玄疏』には省略された部分も少なくないが、今問題とする一段に関しては、両書の間には書写の際の誤脱程度の差しか認められない。

これら三文獻が成立の前後については、おおむね以下のように考えられている。まず、『四教義』は開皇十五年（五九五）に晋王広（五六九〜六一八、後の隋の煬帝）の依頼により『維摩經』註釈の一部として智顛自らが撰述した文献であり、それをふまえて智顛の最晩年に編集されたのが『維摩經玄疏』である。一方、『法華玄義』が弟子の章安灌頂（五六一〜六三〇）の編集により文献として完成をみたのは、智顛の死後の仁寿二年（六〇二）までのことで、先に成立した『四教義』は『法華玄義』の編集に参照されたと考えられている。¹⁷したがつて、文献として完成した順番は、『四教義』『維摩經玄疏』『法華玄義』の順となる。ただし、『法華玄義』は開皇十三年（五九三）になされた智顛の講説に基づいており、その点から言えば、基本的な内容は『四教義』の撰述に先行していることになる。

以上の文献成立の経緯をふまえると、『四教義』と『法華玄義』の両書に等しく述べられる「無過華嚴、大集、大品、法華、涅槃」の一文は、『法華玄義』の講説以来一貫した智顛の自説であつたと考えられなくもないが、一方で『四教義』

以降に唱えられた説が『法華玄義』の編集段階で加えられた可能性も考慮しなければならない。

そこで次に、『華嚴經』『大集經』『大品經』『法華經』『涅槃經』の五經が、先の引用文の中で大乘の真理を極めた代表として列挙された意味について考えていきたい。先行研究において指摘されるように、これらは天台の教判論である五時説との明らかな対応が見られる。

華嚴時……………『華嚴經』

阿含時……………※小乗經とされるので対応なし

方等時……………『大集經』

般若時……………『大品經』

法華涅槃時……………『法華經』『涅槃經』

そこで問題となるのが、方等時の經典として『大集經』を挙げている点である。方等時には『維摩經』などの諸大乘經典が含まれる。『四教義』がそもそも『維摩經』註釈として撰述された文献であることを思えば、ここで方等時の代表に『維摩經』を挙げてよいように思われるが、『大集經』を選んだ意図はどこにあるのであろうか。¹⁸

四 天台教学と『大集經』

『大集經』は、そもそも単独の經典として成立したのではなく、様々な関連の經を『大集經』の名の元に集めて成立しているため、その中に一貫した思想を見いださずという特徴がある。漢訳では曇無讖(三八五～四三三)や那連提耶舍(四九〇～五八九)により主要な部分が訳出され、それらを開皇六年(五八六)に僧就(生

卒年未詳)が合集して六十巻とした。¹⁹ただし、そこには闍那崛多(五三三〜六〇〇)訳が含まれないほか、『般舟三昧経』のような関連する独立した経典も多いことから、広義における「大集経」の範囲はかなりの広がりをもつたものとなる。中国における思想的影響としては、曇鸞(四七六〜五三三)をはじめとした浄土教における依用のほか、²⁰近年では地論宗における『大集経』を重んじる一派の存在などが指摘されている。²¹

天台教学と『大集経』の関係としてまず注目されるのが、南岳慧思への影響である。²²また『大集経』所説の通明禅は、『釈禅波羅蜜次第法門』といった智顛の初期の禅観が開陳された文献にも引用は少なくなく、その影響のほどが窺われる。したがって、「無過華嚴、大集、大品、法華、涅槃」と述べられた背景には、このような当時の『大集経』の流伝と受容があることは間違いないが、ここではより直接的な理由について考えてみたい。

まず、手がかりとしてここに注目したいのは、『四教義』に見られる「大集方等(方等大乘)及此経」という表現である。ここにいる「此経」とは『維摩経』のことであるが、『四教義』では『維摩経』と同等の教えを説くものとして『大集経』を挙げたと思われる例が見られる。

まず『四教義』巻一では、四教の説明を『維摩経』の随文解釈の前に詳しく述べる理由を以下のように説明している。²³

問曰。四教遍通衆経。何故偏於此经文前広弁。答曰。一切漸頓諸経、未必皆明四教。唯方等大集及此経、典具有四教之文。故約此経意、略明四教義也。(大正蔵四六卷七二五頁上〜中)

ここでは、諸経に必ずしも四教が明かされているわけではなく、「方等大集」ならびに『維摩経』だけが、四教の全てを具えているからだ、と説く。また、同じく『四教義』巻二では、それぞれの経典と四教との対応、および四教との関連から立てられる四種四諦との対応が明示される中に、「大集方等」と『維摩経』が同等に扱われる例が

見られる。²⁴

一対経者、若華嚴教、用別円両教、詮無量四諦、無作四諦之理。小乘三藏、漸教之初、但詮生滅四諦之理。大集方等及此経用四教、詮四種四諦之理。摩訶般若用三教、詮三種四諦之理。法華但用円教、詮無作四実諦理。大涅槃通用四教、詮四種四諦之理。(大正蔵四六卷七二七頁上)

この中でも、「大集方等」と『維摩経』では、四教を用い、生滅、無生、無量、無作の四種四諦の理をそなえているという。このように四教の全てをそなえた点が特質とされていることは、先の引用文と全く同じである。以上の「方等大集」「大集方等」は「大集」とあることから『大集経』を指したものとも思われるが、一方で、同じく諸経と四教との対応を説いた『四教義』巻十二で『維摩経』と併記されるのは「方等大乘」である。²⁵

一対経者、若華嚴経但具二教所成。一別教、二円教。……次明漸教之初声聞経、但具足三藏教。方等大乗及此経、具足四教。摩訶般若、具足三教、除三藏教。法華経、開権顕実、正直捨方便、但一円教。涅槃経、具足四教、成五味義也。問曰。方等大乗、亦具四教。何故不成五味義。答曰。不明声聞作仏。五味之義不成。約不定中、得論四教也。(大正蔵四六卷七六八頁上)

したがって、先の「方等大集」や「大集方等」についても直ちに『大集経』と判断することができない。その他の箇所にも「華嚴」「三藏」に次いで「方等大乗」あるいは「大乘方等」が説かれ、「般若」「法華」「涅槃」へと続いていく流れが見られることから、²⁶この場合は方等經典全般を指すものと見られ、『四教義』巻二の「方等大集」や「大集方等」も、個別の『大集経』という經典よりも、方等經典の意味で用いられたと考える方が文脈からすれば自然な理解であろう。

ただし、以下に引用する経と論との対応を説いた文脈に見られる「大集方等」は、個別の經典として説かれた例

である可能性が高い。

二 明別申大乘経論者、如十地論、別申華嚴經、別円両教。大智度論、別申摩訶般若經、通別円三教。応有別申大集方等及此経論、不來此土。金剛般若論、別申金剛般若經。法華論、別申法華經一円教。涅槃論、別申涅槃經、四教五味。(大正蔵四六卷七七八頁中)

引用文に先行する部分では、通申大乘経論(特定の經典によらない経論)として『撰大乘論』や『中論』などが述べられる。それに対しここでは、別申大乘経論(特定の經典に基づく経論)として世親『十地経論』(『華嚴経』)、龍樹『大智度論』(『摩訶般若経』(大品般若経))、世親『金剛般若経論』(『金剛般若経』)、世親『法華経論』(『法華経』)、世親『涅槃経論』(『涅槃経』)などを挙げ、「大集方等」ならびに『維摩経』にも論があるが、それらはいまだ中国にはもたらされていないという。なお、通別による論の区別は、吉蔵(五四九〜六三三)の『三論玄義』にも見られるが、その中で別申大乘経論にあたるものとしては、わずかに『十地経論』と『大智度論』を挙げるだけである。²⁷⁾

『金剛般若経』と『維摩経』をどう扱うかの問題は残るが、ここで挙げられている論の対象となる経は、「無過華嚴、大集、大品、法華、涅槃」の五経に一致する。別申の論があるということが、これら五経が重要な經典だと見なされる論拠となったことが推測されよう。

五 おわりに

これまでの研究において示された五部大乘経が五時説に基づくという見解は、結果的にその通りということにな

るが、『四教義』『法華玄義』などの精査により、厳密には四教との対応から論じられたものであるということが明らかとなった。また、『大集経』が方等経の代表として選ばれていることに関連して、『四教義』に散説される「大集方等」などの語を中心に考察を試みたが、すでに通明観などの実践論において着目されていた『大集経』が、『維摩経』との関連から四教の全てを備えた経として思想的にも重視されていたことが、智顛の『大集経』理解の特色であると考えている。文脈により果たして『大集経』という個別の経典を意図したものであるかが判然としない例もあったが、別申論において論との対応から述べられていることから、「無過華嚴、大集、大品、法華、涅槃」とは、『華嚴経』『大集経』『大品般若経』『法華経』『涅槃経』の五経を指したものに間違いなく、ここに智顛の大乗經典観の一端を見ることができるとは、中国においてその記述は、特に重視されることはなかったようである。

一方、日本では五部大乘経の信仰が大いに発展するが、その背景には五時教判への関心の高まり、その上でこの一文が注目されたことによる。中国とは全く違った受容がなされたことは、日中両国における天台教学史の比較の上からも興味深い事例と言えよう。

なお、本稿では詳しい考察に至らなかったが、現在のところ「無過華嚴、大集、大品、法華、涅槃」の一文は、『維摩経』解釈の過程から生まれて『四教義』以降に述べられるようになったと推測する。智顛自身は他説に対する関心が希薄であったとする指摘が近時、松森秀幸によつてなされているが、直前に三師の説を挙げている点はその指摘と合わせて考慮すべき問題である。

さらには、『華嚴経』『大集経』『涅槃経』を通宗とする地論教学の影響も想起される。天台の行位論が確立される過程において地論教学の影響を受けていることは、つとに青木隆が指摘するところであるが、本稿で考察した部分もその議論の延長上に見られるものである。また、「無過華嚴、大集、大品、法華、涅槃」の前後の文脈では「法

界平等」「平等法界」といった表現が繰り返されるが、このように法界の平等を強調する思想は、『大集経』を重んじる地論師の説に顕著なことが指摘されている。³⁰この点も留意されよう。

これらの問題については未だ考察が十分でないため、ここでは雑感を述べるにとどめるが、考察を通じ、『四教義』や『維摩経玄疏』のテキストを精査する必要を改めて感じたので、再考を期しつつ、ひとまず本稿を終えることとしたい。

参考文献一覽

青木隆（一九九〇）『天台行位説の形成に関する考察——地論宗説と比較して——』、三崎良周編『日本・中国仏教思想とその展開』、山喜房佛書林

石井公成（一九九五）『大集経』尊重派の地論師、『駒澤短期大学研究紀要』第三号

同（二〇二二）『大乘五門実相論』について——敦煌写本中の地論宗系『大集経』註釈書——、『印度学仏教学研究』第六〇巻第二号

大山仁快（一九八七）『五部大乘経研究余録』、『日本歴史』第四六六号

河合泰弘（一九九九）『洞谷記』一種対照（二）、『禅研究所紀要』第二七号

上川通夫（一九九九）『一切経と中世の仏教』、『年報中世史研究』第二四号

菅野博史（二〇二二）『南北朝・隋代の中国仏教思想研究』、大蔵出版（『維摩経玄疏』の組織と梗概』、初出『多田厚隆先生頌寿記念論文集・天台教学の研究』、山喜房佛書林、一九九〇）

坂本廣博（一九七九）『中国に於ける「大集経」の流伝に関するメモ』、『天台学報』第三号

同(一九八二)「大集経」と南岳慧思、『叡山学院研究紀要』第四号

佐々木勇(二〇二五)「春日版『五部大乘経』の底本とされた末版一切経(一)——刻記の比較による検討——」、『広島大学

大学院教育学研究科紀要』第二部六四号

佐藤哲英(一九六二)『天台大師の研究』、百華苑

鈴木格禪(一九七四)「洞谷「五老峰」考」、『駒澤大学仏教学部研究紀要』第三二号

秀氏祐祥(一九五九)「五部大乘経と小藏四大部」、魚澄先生古稀記念云編『魚澄先生古稀記念国史学論叢』、魚澄先生古稀記念会

松森秀幸(二〇二六)『唐代天台法華思想の研究——荊溪湛然における天台法華経疏の注釈をめぐる諸問題——』、法蔵館

湯之上隆(二〇二四)「平安時代の写経と法会——五部大乘経をめぐる——」、『日本中世の地域社会と仏教』、静岡大学人文

社会科学部叢書之四六、思文閣出版(初出『叢書想像する平安文学』第八卷 音声と書くこと)、勉誠出版社、二〇〇二)

注

1 大山仁快(一九八七)八八頁参照。歴史的な課題として具体的に言及されるのは、智昇撰『開元釈教録』(七三〇)など到大乗経として『般若』『宝積』『大集』『華嚴』『涅槃』を五大部としていることとの関連、鑑真請来品の記録として金字『華嚴経』『大品経』『大集経』『涅槃経』があることとの関係などである。

2 大山仁快(一九八七)八八頁参照。湯之上隆(二〇二四)五〇八頁では、法勝寺の法会以前にも五部大乘経が広まる前史として、一切経のうちいくつかを一括して特に尊重する考えが日本において早くから見られること、また鑑真請来以前から『法華玄義』が学ばれてきた伝統や、正暦二年(九九二)に始まる五時講などに着目する。

- 3 上川通夫（二九九九）二七頁、湯之上隆（二〇一四）六頁参照。
- 4 大山仁快（二九八七）八八頁は、流行した時期の範囲を江戸時代まで広げている。
- 5 大山仁快（二九八七）八九頁参照。
- 6 磐山紹瑾の史料として知られる『洞谷記』には、古写本と流布本とで異同があるとされる。河合泰弘（一九九九）二〇六頁によれば、五老峯が霊地であることの理由の一つとして「安自筆五部大乘経」を挙げる箇所についてはほぼ同文であることが確認された。ただし、五老峯の五部大乘経を徹通義介の自筆だとするとする文献もある。鈴木格禪（一九七四）八八～八九頁参照。
- 7 湯之上隆（二〇一四）一九頁に関連する諸研究が挙げられている。
- 8 湯之上隆（二〇一四）四頁参照。
- 9 湯之上隆（二〇一四）二頁参照。
- 10 兜木正亨（一九八二）二八頁参照。
- 11 禿氏祐祥（一九五九）四九六頁参照。
- 12 大山仁快（二九八七）八九頁参照。二百巻の内訳の中で、『菩薩瓔珞本業経』と『仁王般若経』が加えられることについて、宋代華嚴宗の長水子璿（九五六～一〇三三）『首楞嚴義疏注経』に「無過華嚴・涅槃・仁王・瓔珞・大品・法華等経」（大正藏三九卷九二六頁下）と『法華玄義』の文言をアレンジした一文との関連が想起されるが、この点については指摘にとどめることとする。
- 13 湯之上隆（二〇一四）一一～二頁参照。
- 14 佐々木勇（二〇一五）三二〇頁参照。

- 15 『維摩經玄疏』卷四「第三正明円教位者、亦還約七位、明五十二位不同。一十信、二十住、三十行、四十迴向、五十地、六等覺地、七妙覺地。但解者不同。有師言。円教頓悟。一悟即是仏、無復位別之殊。説十地位者、為鈍根人耳。如思益經云。如此學者、即不從一地至二地。又有師解言。円教既是頓悟。初心二悟、即究竟円極。而有四十二位者、但是化物方便、立淺深之名耳。故楞伽經云。初地即二地、二地即三地。寂滅真如、有何次位也。又有師言。円教頓悟至十住、即是十地。而説有十行、十迴向、十地者、此是重説意。謂、此諸解釈、悉是偏取。但平等法界、尚不論悟与不悟。孰論淺之与深。不悟而論悟者、不淺不深、論淺深也。尋諸大乘經、明理究竟、無過華嚴、大集、小品、法華、涅槃。明法界平等、無説無示。而菩薩位行、終自炳然」（大正藏三八卷五四〇頁下）。
- 16 『四教義』と『維摩經玄疏』の対応については、菅野博史（二〇二二）三三二～三三八頁参照。
- 17 以上の智顛の文献が成立した経緯については佐藤哲英（一九六二）三三八～三三九頁参照。
- 18 『法華玄義』の註釈書である荊溪湛然（七一〇～七八二）の『法華玄義釈籤』には、この部分に対する特別な解釈は付されていない。湛然がこの部分を特に重視していなかったことを意味するものであろう。また、管見の限り、本稿で検討する『四教義』と対応する『維摩經玄疏』および『法華玄義』の引用箇所以外に、このように五経を宣揚するような文は見られない。
- 中国天台教学研究においても、概してこの問題に対する関心は薄く、坂本廣博（一九七九）一三六頁で、わずかに「近世日本天台では、五部大乘として、華嚴……涅槃をいう場合がある」と言及されるのみである。
- 19 『続高僧伝』巻一「開皇八年。有招提寺沙門僧就、合之為六十卷」（大正藏五〇卷四三四頁中）。
- 20 中国における『大集經』の流伝については、坂本廣博（一九七九）に詳しい。
- 21 石井公成（一九九五）一〇三～一〇四頁参照。
- 22 坂本廣博（一九八二）六一～六五頁参照。

23 『維摩經玄疏』卷三(大正藏三八卷五三四頁上)に対応する文が見られ、詳しい内容は「別有大本」と『四教義』に譲つておく。

24 『維摩經玄疏』卷三(大正藏三八卷五三四頁中)に対応する文が見られ、「大集方等及此經」に作る。

25 『維摩經玄疏』卷四(大正藏三八卷五四四頁中〜下)に対応する文が見られ、「方等大乘及以此經」に作る。

26 例えば『四教義』卷二「第五明經論用四教、多少不同。若華嚴頓教、用別円両教。若漸教之初小乘經、但用三藏教。若大乘方等、則具有四教。若摩訶般若、用通別円三教。妙法蓮華經、但用円教。大涅槃、名諸仏法界、四教皆入仏性涅槃。

諸論隨經、用教多少、義類可解」(大正藏四六卷七二五頁上)。ただし、大正藏の校異によれば「大集方等」としている異本もあるという。このことから、その他の箇所についても「大集」と「大乘」が混用されている可能性が否定できない。

27 『三論玄義』「十地論智度論等、大乘別論」(大正藏四五卷一〇頁中)。

28 松森秀幸(二〇一六)六二頁参照。

29 青木隆(一九九〇)三九〜五四頁参照。

30 石井公成(二〇二二)二三頁参照。